

作物名：水稻

病害虫名：いもち病（病原：*Pyricularia oryzae*）

1 被害の特徴と診断のポイント

（1） 葉いもち（写真1、2、3）

- 初め円形～楕円形で灰緑色水浸状の病斑（急性型、進展型）を生じる。その後、長紡錘形ないし菱形で中央部灰白色、周縁が濃褐色、その外周が黄褐色の病斑（慢性型、止り型）となり、病斑からはみ出し褐変した葉脈（壊死線）が見られる。抵抗性品種の場合は小さな褐点（褐点型）の病斑となる。

（2） 穂いもち（写真4）

- 穂首節、枝梗に暗褐色の病斑を生じる（首いもち、枝梗いもち）。病斑部から先は萎凋枯死して白穂となる。
- 粳では、外穎の発生が多く、はじめ蒼白色、のちに灰白色となって枯死する（粳いもち）。

（3） その他（写真5）

- 箱育苗では、苗の基部が暗褐変し、下葉に病斑が現れる場合と、1.5 葉期以降心葉が急速に萎凋枯死する場合とがある（苗いもち）。その他、節や葉節でも発生する（節いもち、葉節いもち）。
- 葉に大型の病斑が形成されると、その後に形成される葉鞘と葉身が短くなって展開し、多発時には株が萎縮する（ずりこみ）。



写真1 慢性型病斑

2 伝染源・伝染方法

- 保菌種子や被害わらが第一次伝染源となる。保菌種子を播くと苗床で感染・発病し、苗いもちとなる。被害わらでは、気温が上昇し降雨にあうと、病斑上に分生子が形成され、風雨によって飛散して葉いもちを起こす。感染あるいは罹病した苗は、本田の葉いもちの伝染源となる。
- 葉いもち病斑上に形成された分生子が穂いもちの伝染源となる。特に止葉を含めた上位3葉の病斑数が多いと穂いもちが多発する。
- 分生子は夜半から早朝にかけて多く飛散する。葉に落下した分生子は、葉面が濡れていると付着器を形成し、表皮を貫通して細胞内に侵入する。

3 発病しやすい条件

- 平均気温 19～25℃、降雨日数が多く多湿、夜間の風が弱く朝露の乾きが遅い場合や、窒素過剰により稲体が軟弱徒長気味で葉色が濃い場合は、葉いもちに感染しやすい。
- 低温による出穂期間の長期化は、穂いもち感染可能期間も長期化し、穂いもちが発生しやすい。

4 防除方法

（1） 耕種的防除

- 健全種子の利用、塩水選や種子消毒の確実な実施、補植用苗の早期撤去。
- 土壌中の窒素が多く発現する水田では、基肥窒素量を減らす。

（2） 化学的防除

- 育苗箱施用剤による葉いもちの予防防除、粒剤または茎葉散布剤による穂いもちの予防防除を行う。発生が確認された場合は速やかに茎葉散布剤による追加防除を行う。
- 本県では MBI-D 剤及び QdI 剤耐性菌が確認されている。これらと同一系統の薬剤は、防除効果が著しく低下する恐れがあるため使用しない。

5 出典

(1) 参考文献

- 宮城の稲作指導指針【基本編】（宮城県）
- 農業総覧 原色病害虫診断防除編1（農文協）
- 植物防疫 第72巻第2号:42-55（日本植物防疫協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 急性型病斑



写真3 褐点型病斑



写真4 穂首いもちによる白穂



写真5 ずりこみ

（令和5年9月改訂）